

公共図書館 展示

ブックケア

—未来へつながる保存の技術—

本を長く大切にさせていただくための保存の真髓を伝える展示も今年で5年目を迎えました。保存の技術として、修理の基本や材料・道具、修理の基本的な技術を中心に、劣化の原因や日頃のケアの方法について、解説パネルと実物の道具類や修理後の本を展示して御紹介しました。

体験コーナーでは、本の仕組みを理解するための3種の綴じの方法を体験するワークショップを開き、大勢の方が参加してくださいました。



【パネル展示】

<保存の技術> (知っておきたい基本)

◆修理の基本と材料

①修理の基本

- ・何度でもやり直せること
- ・安全な材料を使う
- ・柔らかく軽く仕上げる

②基本的な材料

和紙(楮)(極薄・薄・中厚・厚4種類)、でんぷん糊、混合糊(でんぷん糊2:白ボンド1)、白ボンド、麻糸

◆本の修理の道具

筆(こしのある平筆)、カッターナイフ、

定規(金型30cm)、目打ち、製本針、締め板、重し(5kg、漬物石等)、櫛矢(目打叩き棒)

<治す技術> (修理の基本の技術)

◆『本の修理 きほんのき』その1~8

本を長く利用するために気をつけたいこと、修理に最低限必要な道具や材料、知っておきたい基本的な修理方法を、ちょっとしたコツやヒントをまじえて御紹介し、印刷物としても配布しました。

- その1本のなりたち
- その2とりあつかい
- その3道具のこと
- その4材料のこと
- その5やぶれをなおす
- その6かたちをなおす
- その7ページがとれたら
- その8ステップアップ

◆ここに注目! 紙を綴じて本にする

本の修理でぜひ知って頂きたい綴じの技術に注目し、基本的な綴じ方について、修理した本を展示しながら御紹介しました。

①中綴じ(三つ目)

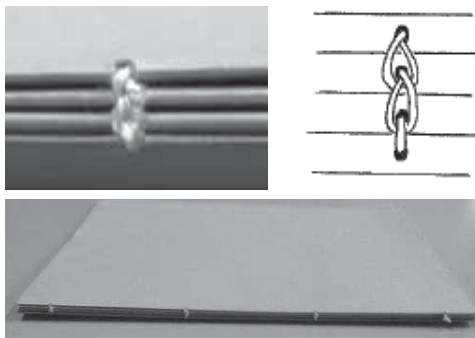
半分に折った紙の真ん中に三つの穴をあけて麻糸で綴じする方法。ホッチキス止めの冊子もこの方法で綴じ直せます。

②平綴じ(四つ目)

重ねた紙のノドに四つ穴をあけて麻糸で綴じする方法。無線綴じの本が壊れた時に使う方法です。

③リンク・ステッチ

折丁の背を一本の糸でかがる方法。ちょっと難しいですが、かがりの糸が切れて折丁がとれてしまった時、この方法を知っていれば修理することができます。



<劣化の原因を知り予防する（主な事例）>

◆日常の取扱いによる劣化の原因

①取り出し方《無理に引き出す》

背表紙に指をひっかけると壊れます。

②もどし方《無理に押し込む》

ゆがみ、折れ、シワ、やぶれの原因。

③置き方《不安定に置く》

本の形がゆがむ原因。

④運び方《手元から落とす》

本は衝撃に弱い。たくさん持たない。バランス良く、落とさないように運びます。

⑤めくり方《乱暴にページをめくる》

紙は破れやすいため優しく取り扱います。

⑥コピーの取り方《ノドを押しつける》

背割れ、ページ取れなどの原因。

⑦雨&水《水に濡らす》

水分は紙の天敵。適切な処置をしても完全には元に戻りません。

⑧論外《食べかす、汚れた手、書き込み》

<本のケア>（日頃できるケアを紹介）

◆正しい取扱い方

①正しい本の取り出し方

〈ポイント〉背に指をひっかけない!

- i 両サイドの本の背を軽く押す。
- ii 目的の本の真ん中を持ち、取り出す。

②ドライクリーニング

〈ポイント〉水分を使わずに、刷毛やクロスで本をきれいにします。

- i 片手でしっかり持つ。
- ii 小口を刷毛ではらう。天→前→地の順。
- iii 見返しのノドを刷毛ではらう。
- iv 全体を布で拭く（化学雑巾は不可）。

◆効果的な手当て

①ページの折れ・シワの手当て

〈ポイント〉ごく少量の水気をあたえてから重しをのせて乾燥させることで、ページを平らに戻します。

ただし、弱った紙や写真集などの塗工紙に

はできません。

- i 折れ・シワを取りたいページの下に白紙などの吸水紙を挟む。
- ii 水で濡らして固く絞った布巾で水気をあたえ、折れやシワを伸ばす。
- iii 新しい白紙を上下面に挟み、本を締め板で挟み重しをのせて乾燥させる。

②水濡れ（雨&水）の手当て

〈ポイント〉水濡れの手当てはスピード勝負。白紙などの吸水紙を挟み水分を取ることで、元の状態に近づけます。

- i 1ページごとに白紙を挟み水気を取る。
- ii 水を吸ったら白紙を取り換える。
- iii さわってもほとんど湿り気を感じなくなってから、本を締め板で挟み、重しをのせて乾燥させる。

【体験コーナー】3種の綴じ体験

- ①中綴じ（三つ目） ★★
- ②平綴じ（四つ目） ★★★
- ③リンク・ステッチ ★★★★★ ★：難易度



昨年に引き続きワークショップは大変盛況で、多くの方に体験していただきました。特に折丁を綴じる「リンク・ステッチ」は、皆様の関心が高いので、今後は実際の修理に活かす方法を御紹介できたらと考えています。

また来年、パワーアップして臨みますので、次回もお楽しみに！